

「ポケットモンスター アドバンスジェネレーション」終了記念作品

ポケモン紐育に立つ

マイソフ

昴機は右翼にさわさわと移動すると、じっと身を伏せてジェミニの仕掛けるのを待った。最近「昴機に近寄るな」と痲痺を立てて言い放つこともなくなった昴だが、左翼のジェミニがダイアナの支援を受けつつ突出するタイミングを見計らって、連携攻撃で敵を挟み込もうと、飛び離れた位置に埋伏しているのである。

急にセンサが賑やかになった。光点はひとつ、ふたつ…みつつ! 昴はやや品のない舌打ちをすると、左に飛び退った。大河チームは昴チームの配置を読んで、片側に全員でかかってきたのだ。「モアモアショット」リカリッタが必殺技を使った形跡を音声センサが拾うのとほぼ同時に、機体を強い衝撃が襲った。「このタイミングだ!」昴は避けきれないと覚悟を決めると、ジェミニに連携攻撃を催促した。大河チームに突っ込んで、なるべく多くの機体を連携攻撃に引っ掛けるまでだ。「ホームラン!」ジェミニが呼応した。攻撃対象カウンタは? ゼロ。リカリッタはすばやく後退し、射程外に出ている。メインスクリーンをにらみつけた昴に、サジータが射程ぎりぎりから通常攻撃をかけてきた。

昴は力を抜いて、ため息を漏らした。自機が削り切られたことを直観したからだ。

「こりゃあ困ったねえ。どこが困るか、わかるかい」サニーサイドは、反省会をこう切り出した。

「昴は言う。負けは負けだと」昴は淡々と言った。「昴が左に移動するタイミングが遅かった」

「僕が行っているのは、そういうレベルのことではないんだよ」サニーサイドは快活に言いながら、ちらりとラチェットを見た。

「手の内がわかりすぎているのよ。お互い」ラチェットは身を乗り出した。「武器の種類、移動のスピード。今回の大河チームの戦術は、昴チームに対する有効な機動です。でもそれは、相手のことを知り尽くしているから」大河が困った顔をせずに聞いているのは、大河自身がそのように感じていたからだろう。

「未知の敵と戦う機会を、作る必要があるわね」ラチェットが提案するともなく、独り言を言うともなく言った。

「こういうときこそ、東洋の知恵に頼るべきだと、僕は思うんだ」サニーサイドは一同をぐるりと眺め、立ち上がると一回転して右手を差し上げた。「ポケモンだよ。ポケモン」

「いま、大流行してますよね」ジェミニが無邪気に応じた。

「そう。まさに東洋の神秘。日本文化のきわみさ」サニーサイドは言った。「フォルム自体が無数の多様性を持つが、わざマシンとわざおしえ人の存在によって、あらゆる奇襲が可能だ。ウソハチ、イツ・ショウタイム」サニーサイドは紅白に塗り分けられたボールを司令室のメインテーブルに向かって振り回した。盆栽のような姿のポケモンが現れた。

「ウソハ、ウソハ」周囲をせわしなく不安げに見回したウソハチは「ウソハーッ」と泣き出した。「おお、よしよし、こわがらなくていいのよ」思わず手を出したダイアナにちょこちょこ駆け寄ったウソハチは、ダイアナの膝の上にちょこなんと乗った。

「ウソハチは、見ての通りいわタイプのポケモンなんだが」「盆栽だから、くさタイプなんじゃないのか」サニーサイドの解説をサジータがさえぎった。「ところがこのウソハチは、でんきタイプのわざだって覚えるのさ。ウソハチ、私にかみなりパンチだ」「ウソハーッ」ダイアナの膝から飛び上がったウソハチは、サニーサイドにかみなりパンチを浴びせた。「ぐはあっ」髪の毛を焦がしたサニーサイドは、解説を続けた。「予想していたとはいえ、殴られるのはしびれるもんだね。外見からは想像できないような攻撃だって、来るわけさ」

「近々、3対3でポケモンバトルをやります。それぞれポケモンをゲットしておくように」ラチェットが座をまとめた。

(注) 執筆時点でウソハチはアニメにのみ登場するポケモン(ダイヤモンド・パール登場予定)で、バトルに出したときかみなりパンチを使えるかは定かではありません。

昴は五番街のポケモンショップで玄関をくぐると、物珍しそうにモンスターボールの列を見回した。

「昴様ですと、ロコンかイーブイはいかがでございましょう」店主はうやうやしくカタログを指差した。店員がすかさず棚からモンスターボールを取り出すと、ポケモンを出して見せた。昴がじっと2匹を見つめて飽きないように見えたので、店主が価格の提示をしようとしたころ、昴はついと視線をそらした。「他にはいないのか」

おろおろする店主に、昴は簡潔に言った。「時間がないんだ。気性の繊細なポケモンが慣れるには長いことかかる。もっと、そうだな。一本気なポケモンがいい。これなどはどうだ」昴はカタログの一点を指した。「は、はあ、在庫がございしますが」とまどう店主に、昴は独り言のように言った。「こいつらの性別を気にするものは、まずいないだろうな。気に入った」

昴の指先には、ビリリダマの姿があった。

「ぶんがくポケモンか、えんげきポケモンはいないのでしょうか」にこやかに尋ねるダイアナを、ポケモンショップの主人は扱いかねていた。「どくしょポケモンでもいいのですけれど」

なにかよほど根本的な勘違いをしているらしいことは、ダイアナにも感じ取れた。尋ねて答えを聞けばすぐにわかる、というものでもなさそうだった。ダイアナは、すごすごとポケモンショップを出た。ビレッジの図書館で調べ物をする前に、ふと思いついたことを試してみることにした。

「みんなの中にも、ポケモンさんは居るのですか」セントラル・パークで鳥にえさをやりながら、ダイアナは見回した。

「ピッ、ピジョン」答える声がした。

「あなた、私と一緒に、戦いに参加していただけませんか」ダイアナは遠慮がちに頼んだ。鳥たちが口々に騒ぎ、大方はうらやましがっているのが、ダイアナには感じ取れた。おだてられたピジョンは、傍らの木に登ると、甲高く「ピジョン」と鳴いた。

「ピジョンさん、ゲットなのですね」ダイアナはささやくように言いながら、そっとモンスターボールをピジョンに近づけた。

「ノコ、ポケモンに進化しろ」倉庫の家でリカリッタに言われて、ノコは悲しげに

「キュー」と鳴いた。「つよいのがいいな。ノコ、今日からリザードンになれ」「キュー」

ノコがリザードンになろうとしないので、リカリッタは言った。「しかたない。リカ、バウンティハンター。ポケモン捕まえて、とりあえず撃つ。街にもポケモンが居るって、サニーサイド言ってた」

思い立ったらすぐやってみるのがリカリッタである。「ノコ、行くぞ」リカリッタが振

り返ると…

ノコが2匹居た。

「ノコ、増えたか」「キュー、キュー」2匹は誘い合わせたように首を横に振った。「いっぱいきは、にせものだな」リカリッタはキネマトロン型ポケモンずかんを取り出すと、2匹にかざしてみた。

1匹には、反応がない。ノコらしい。

もう1匹にポケモンずかんをかざすと、たちまち音声が流れた。「メタモン。へんしんポケモン…」

「おまえ、メタモンか」リカリッタが銃を突きつけるとノコの姿はぐずぐずと崩れて、不安げな不定形の塊が現れた。「だましたやつは銀の銃で撃つ」リカリッタは銀の銃をぐいっとメタモンに押し付けた。「リカといっしょに戦ってくれるなら、撃たないでやる」メタモンは力なくうなずいた。

「よし。仲直りのパーティーだ。ノコ食っとけ」差し出されたノコは、悲しげに「キュー」と鳴いた。

「ケンタロスなら、山ほど用意してるんだがねえ」カルロスは言った。買う人間がいれば、取るビジネスも成立する。ことの是非はともかく、ハーレムの貧しい人々が手間隙をかけてポケモンを捕獲し、ときには育成代行に手を染めることが増えていた。だからハーレムの顔役ともなると、たいていのポケモンの都合がつくのである。

「ケンタウロスのメンバーが、みんなケンタロスを使うってわけにも、行かないしねえ」サジータは笑った。「そうだ。猫、好きだったな」カルロスが無造作にモンスターボールを振ると、にこやかな子猫ポケモンが現れて、「エネ～」と鳴きながらカルロスに体をこすり付け、無警戒にサジータに近寄った。

「サジータにならやってもいい…サジータ！ おーい。もしもーし」カルロスが呼びかけても、エネコを抱き上げたサジータの耳には何も入っていないようだった。

「エネコにゲットされやがった」カルロスはつぶやいた。

「とうとう完成したんだ」ジェミニはビルを見上げた。バイエリアに建設中だった紐育ポケモン研究所は、ようやく本稼動を始めたばかりだった。

バーンスタイン博士は、ジェミニを愛想よく迎えた。「今から、ポケモンを一から育て

るのかい」「はい。そうしたいんです」ジェミニは遠慮がちに言った。10才の誕生日に旅立つのがトレーナーの慣わしだから、ずいぶん遅咲きである。

「大人なら、ポケモンの飼い方さえしっかり覚えてくれれば、ショップでポケモンかタマゴを買うのも悪いことではないと思うがな」「ボクも駆け出しだから、一緒に成長したいな、なんちて、なんちて」ジェミニの言葉に、博士はうれしそうにうなずいた。本当はポニータが欲しかったのを、ラリーが気を悪くするような気がしてやめたのだが、ジェミニは黙っておくことにした。

「では、お望みのポケモンをあげよう」博士はモンスターボールを差し出した。オレンジ色の鳥ポケモンが姿を現した。

「よろしくね、アチャモ」ジェミニはかがみこむようにアチャモに言った。

大河は迷っていた。帝都から最新のポケモンを送ってもらうことも考えたが、自分の欲しいポケモンはどんなポケモンなのか、イメージがわからないのだ。

「早くしないと、育成に遅れを取ってしまうわよ」ラチェットが笑った。「ラチェットさんも、バトルに参加するんですか」「さあ、どうかしら。これだけは、新次郎君にも内緒よ」

ラチェットの用事に、用もないのについてきているのは、いつもならとても幸せなシチュエーションなのだが、今日はそうは行かなかった。ラチェットはそんな大河がおかしくてたまらないようだった。

「泥棒だあ」ウォール街を通りかかると、大きな声が聞こえた。袋を抱えた男が人をかき分けて走っている。大河が走り出そうとしたそのときだった。

「ピカチュウ、でんこうせっかだ!」

足元を猛スピードで、鋭角に曲がりながら駆け抜けていく黄色い影。それが男に近づいたころ、第二の指示が飛んだ。

「かみなりだ!」

泥棒の姿は、まぶしい火花の噴流に包まれた。スピードががくんと落ちると、泥棒はその場に倒れた。駆け寄る大河を追い抜いていったのは、小さい体を利して巧みに人ごみをすり抜ける、少年。「よくやったピカチュウ」少年はポケモンをほめた。大河にできるこ

とといたら、泥棒を縛り上げて、警官が来るまで確保することくらいだった。

「すごいね君。ポケモンと息がぴったり合ってる」大河は声をかけた。「世界一のポケモントレーナーを目指して、旅をしてるんです」少年はよどみなく答えた。

「私は用事を済ませてくるから」ラチェットが後ろから言った。「いろいろ教えてもらいなさいな」

「はい、ソフトクリーム」「サンキュー」授業料代わりのソフトクリームを、少年は受け取った。臨海公園は午後遅く、そろそろ空の端が赤みがかっている。ピカチュウもなにか食べ物ももらって食べている。

「ちょっと事情があって、急にポケモンバトルをしなきゃいけなくなってさ」大河は切り出した。「ポケモンの選び方が、わからなくて」

「そういうのは、わからないな」少年は言った。「仲間になる前に、まずバトルなんて」「そうか。君の言うことは、わかる気がする」大河は、紐育に来たときのことを思い出していた。当然戦いに参加できると思っていたら、みんなのために何かができる男と認めてもらえるまで、戦場に出してもらえなかったこと。

「聞いて…いいのかな。バトルをしなければいけない事情って」少年は控えめに言った。

「ごめん」大河は謝るしかなかった。

「いいんだよ。どんな理由でも、ポケモンと友達になってくれる人が増えるのは、うれしいから」少年はピカチュウの頭をなでた。

「こいつとも、最初の最初は、けんかばかりでさ」

「どうして、このポケモンを選んだの」「こいつしか、残ってなかった。ポケモンをくれる日に、寝坊しちゃってさ」「ピイカァ」このやろう、と言いたげにピカチュウが合いの手を入れた。

「こいつと、助けたり、助けられたりしてるうちに、やっと友達になれてさ」少年はしゃがみこんで、ピカチュウを自分の目の高さで見た。「雪山に俺とポケモンだけで取り残されたときなんか、もう死んじゃうかと思った」

「こわくなかった?」大河もしゃがみこんで、少年とピカチュウを見ていた。

「忘れた」少年はさばさばと言った。「夢中だった…かな。ポケモンたちを守るのに」

「昔…昔、ぼくもね」大河は言った。「危ないところへ、大切な仲間を連れて、飛び込んで行ったことがあるんだ。必ず勝ちます、なんて言い切ってたね。でも…」

「俺が世界一のポケモントレーナーになるなんて、おかしいよね」少年は快活に言った。
「でも、その思いがあるから、今をがんばれる。それとおんなじ。最初から天下を取れるなんて、決まってないよね」

大河の心のどこかが、妙に熱っぽくなった。信長が上機嫌らしい。

「大人ってさ、つらいよね。負けたらすごく悔しい。次をがんばろう。俺たちだったら、それで済むのに、いろいろ背負っちゃってるから」

「ありがとう」「もういいの？ ポケモンのタイプとか」「いや、やらなきゃいけないことは、わかったような気がする」大河は立ち上がった。

「ほう、新次郎はミズゴロウか」サジータは訓練場に入るなり言った。リカリッタのメタモンもミズゴロウに変身して、盛大にみずでっぼうの応酬をしている。

「サジータさんもどうです」新次郎が声をかけた。「うっとけー。うっとけー」リカリッタがメタモンをけしかける。

「いいけど、あたしのエネコにちょっとでも傷をつけたら、あとで覚えておきな」「サジータさん、それ、普通のポケモンバトルじゃないですから」サジータの言葉に新次郎は苦笑した。

「大河君はミズゴロウだって」サニーサイドは支配人室に入ってきたラチェットに声をかけた。「ええ、それもレベル1からだから、大変ね。ジェミニのアチャモとよくレベリングしてるみたいだけど」

「ふーん、なにか考えがあるのかな。いくら安月給でも、もっと強いポケモンを買えるだろうに」「それはわからないけど」ラチェットは笑った。「ポケモンとポケモンがすごく仲良くなっちゃって」「なるほどねえ。隊長さんの狙いは、そこか」サニーサイドは満足げに笑った。

サニーサイドが訓練場に入ってきて、ジェミニのアチャモとサジータのエネコは戦いをやめなかった。「アチャモ、つばめがえし」「かわしておうふくビンタ！」トレーナーたちの指示もヒートアップする。

「ほのおのうず！」アチャモの炎がエネコを包んで消えない。持続性の炎だ。勝負を急かされたサジータは、いまいましげに叫んだ。「もう一度おうふくビンタ！」

アチャモはチョコチョコと逃げ回る。「エネ…」狙い通り、力尽きたエネコが倒れた。

「エネコ戦闘不能」大河が宣言する。サジータは肩をすくめて、モンスターボールをかざした。「ゆっくり休みな、マイハニー」

「よし、それじゃあ、バトルと行こうじゃないか。僕たちのポケモンに、星組でかかってきたまえ」サニーサイドは叫んだ。

「僕たち？」大河は訓練場を見回した。

「僕と、ラチェット、そして王先生だ」いつの間にやら、訓練場にはラチェットばかりか、王先生も姿を見せえている。

「変則3対3でいきましょう。私たちのポケモンは高レベルだから、みんなは交代自由。力を合わせて、私たちを倒しなさい」ラチェットがいたずらっぽく言った。「審判は、加山さんをお願いします」

「こちらから先に、手の内を明かすでしょうか」サニーサイドは余裕を見せた。加山がうなずくのを待って、サニーサイドはモンスターボールを振った。

「ソルロック、イツ・ショータイム」

太陽のような姿をした隕石ポケモン、ソルロックがゆらゆらと現れた。

「私はこの子よ。お願い、ロゼリア」

ラチェットが呼び出したのは、両手に花を持ついばらポケモン、ロゼリア。

「では、参りますぞ。おいでムウマ」

ぼうっと現れたのはゴーストタイプのポケモン、ムウマ。

「しまったな、当然予測しておくべきだった。いや、サニーサイドはこれを気づかせるために」昴がひとりごとを言った。「役柄が偏っているんですね、私たち」ダイアナが応じた。

ポケモンのタイプや技にはじゃんけんのような相性がある。悪タイプ、毒タイプといったマイナスイメージのポケモンが、星組側にいないのだ。

「サジータさん、昴さん、ジェミニ、先発してください」大河はメンバーを指示した。

先発から外れたダイアナがポケモンたちの様子を見ると、両手に扇を持って応援している大河のミズゴロウ、それそっくりに変身して扇を振るリカリッタのメタモンが目に入った。ダイアナのピジョンもそれに合わせて、陽気に羽をばたばたさせている。

「大河さんのミズゴロウ、やっぱりポケモンの隊長さんなんですね」ダイアナは笑った。

大河は微笑で答えただけで、「集まってください」と星組を呼んだ。

「ムウマを狙いましょう。ノーマルわざは効きませんから、注意してください」昴、サジー

タ、ジェミニはうなずいて散った。

「なんでムウマなんだ？」リカリッタが言うので、ダイアナが説明した。「ゴーストポケモンは特殊な間接技が多いの」

「レディー・ゴー」加山が試合開始を宣した。

「ひかりのかべ」と昴。「つるぎのまい」とジェミニ。「ムウマにアイアンテール！」サジータは威勢よく叫んだ。

「かわしてエネコに、くろいまなざしじゃ」王先生はムウマに命じた。

「早速来たか」大河がうなづいた。くろいまなざしを浴びると、そのポケモンは交代できなくなる。ゴーストタイプがよく使う技である。

「ソルロック、しんぴのまもり」サニーサイドが歌うように言う。「ロゼリア、エネコに、やどりぎのタネ」ラチェットに命じられて、ロゼリアは何かを飛ばした。

状態異常を防ぐしんぴのまもり、続いて特殊攻撃を防ぐひかりのかべが発効した。アイアンテールをひよいとかわしたムウマは、くろいまなざしをエネコにヒットさせた。しかしロゼリアのやどりぎのタネは、ひかりのかべに影響されて失敗した。

「当たったらどうなるんだ」リカリッタにダイアナは説明した。「体力を少しずつ吸われてしまうの。くろいまなざしと組み合わせるつもりね」

つるぎのまいで攻撃力が上がったジェミニのアチャモが、ムウマにつばめがえしをかける。しかしムウマはアチャモに「くろいまなざし」を当て、エネコは今度こそ「やどりぎのタネ」を食らってしまった。昴は作戦通りムウマをスパークで狙い打つ。

サジータは命じた。「ムウマにもう一度アイアンテール」今度は命中した。だがまだ倒れない。相性のあまり良くない攻撃ばかりだから、まだ立っていられるのだ。エネコはぜいぜいと息をついた。「やどりぎのタネ」が効いている。

「交代させられたらなあ」大河は悔しがった。交代させられればやどりぎのタネの効果は消える。

「ソルロック、エネコにサイコウェーブ」サニーサイドが勝ち誇って叫んだ。倒れたエネコを、サジータがモンスターボールに戻す。「ダイアナさん」大河がヒジョンの参戦を促した。

リカリッタの肩に、サジータが手を置いた。「リカ、よく見るんだ。どれに変身して、

どんな技を使うか」「うん」

「アチャモに、はなびらのまい」ラチェットが鋭く叫んだ。大ダメージを与える技で、反動があるのだが、「しんぴのまもり」でそれが打ち消されている。「ムウマにつばめがえし」ジェミニがそれにかまわず叫ぶ。ムウマは虚を衝かれ、避けるのが遅れた。ふたつの攻撃は、ほぼ同時にヒットした。

「ムウマ戦闘不能、アチャモ戦闘不能」加山が叫んだ。アチャモはレベルが低かったので、「はなびらのまい」の一撃で倒れてしまったのだ。

「これで楽になった。ありがとう」大河が悔しそうなジェミニに声をかけた。「リカ、任せる」大河の声に、リカはメタモンをフィールドに入れると叫んだ。「ロゼリアに変身」「じしん」サニーサイドの指示に、ラチェットが向き直った。「なんですって」

「じしん」は、味方も含めて自分以外に大きなダメージを与える。ラチェットも巻き添えを食ってしまうのだ。

「なんでそんなことを」声を震わせるジェミニに、サジータが言った。「リカのロゼリアに、何もされたくないのさ。ラチェットがロゼリアの技を見せちまってるだろ」

「へんしん」しても体力はメタモンのままだ。今なら、「じしん」の一撃で倒せるのだ。

「ロゼリアに、はがねのつばさ」ダイアナが決然と言った。ロゼリアは「はなびらのまい」をしばらく止められない。ピジョンとロゼリアは真っ向からぶつかり、そして倒れた。その間に、大河のミズゴロウがいよいよフィールドに入ってくる。

「ビリリダマ」昴は静かに言った。「どくどく」

誰に、という必要もなかった。ソルロック、ミズゴロウ、そしてビリリダマしか、もうフィールドには残っていない。そしてソルロックは毒状態になったもののほとんどの体力を残し、ビリリダマはほとんどの体力を失っていた。

泣きそうな顔をしているリカリッタの肩をラチェットが抱いた。「リカが強そうだから、サニーサイドは私とリカを引き換えにしたのよ」リカはゆっくりとうなずいた。

「新次郎、何かを待ってるみたい」ジェミニがささやいた。まだ大河はミズゴロウに指示を出そうとしない。昴はビリリダマに次の指示を出そうとしたが、それがサニーサイドを急かすことになった。

「じしん」

1対2の状況では、それしかない。それでもソルロックの体力には十分な余裕がありそうだった。

「ビリリダマ、戦闘不能」加山の声が上ずり気味なのは、勝負に見入っているせいだろう。その声にかぶさるように、大河の指示が飛んだ。

「がむしゃら！」

「しまった」サニーサイドが思わず冷静を失った。

「がむしゃら」は、相手の体力が自分より大きいとき、自分の体力まで相手の体力を削る技である。ソルロックが削りに削ったミズゴロウの体力まで、ソルロックの体力が落ちてしまった。

そこへ、毒の継続効果が来る。「ミズゴロウ、逃げ回れ」大河が叫んだ。

ソルロックがゆらゆらと倒れるまで、それほど時間はかからなかった。

「おめでとう。負けたよ」サニーサイドが大河に握手を求めた。

「総司令、戦いの中で、気づいたことがあるんです」大河は握手しながら言った。

「ぼくたちは五輪の戦士として引き合い、チームワークをはぐくんできました。でも逆に言えば、僕たちは分業したプロ集団ではないんです」

「それで？」

「ぼくたちは、絆から出発した集団だから、それだからこそ、自分たちではっきり役目を分担できるようにすれば、もっと強くなるはずですよ。いや、ひとりひとりが、いくつも役目をこなせるようになれば、もっともっと強くなれるはずですよ」

「仲間割れで自滅してくれるような敵ばかりとは、限らない。その通りだね」サニーサイドは笑った。いつしか、周囲には隊員たちが人垣を作って、ふたりの話に聞き入っていた。

「大河くんは、なぜミズゴロウを選んだの」ラチェットがミズゴロウの頭をなでながら言った。「人懐っこくて、友達を作りやすいから？」

「それも大事なんですけど、紐育華撃団は、結果を出さなきゃいけないんです。大人だから」

「だから隊員のポケモンにさんざん手の内を探らせて、最後に登場か。大河くんもワルになったねえ」

「サニーサイドほどじゃあないけどね。ねえ大河くん」ラチェットはにこやかだったが、サニーサイドはかかとで踏まれないように自分の足を引っ込めた。

「結果は努力についてくるものさ。『がむしゃら』はかなりの高レベルじゃないと覚えられない技だよ」サニーサイドは続けた。

「ばれてましたか」大河は笑った。「今日もほんとうに紙一重でした。必ず勝てると言い切れる自信はないけど、この子がいるからみんなが精一杯がんばれるような、最後のポケモンにしたいくて」

「東洋の知恵かい」

「いいえ」大河は言った。「パンドラの希望ですよ」

完

あとがき

Tvアニメ「ポケットモンスター」が新シリーズに切り替わる機会に、最近のお気に入りゲーム「サクラ大戦V」とクロスさせたお話を書いてみることにしました。「サクラ大戦V」が商業的にあまり成功していないのに加え、ファン年齢層が違うので、両方好きという人は少ないかな。

どうせなら、と「ポケットモンスター エメラルド」で実際に覚えられる技から各ポケモンの手の内を設定し、なるべくゲームソフトのバトル進行に合わせて進めました。ゲームソフト、カードゲーム、そしてアニメのポケモンバトルはまったく同じというわけではありません。例えばアニメにもメタモンは登場しますが、「へんしん」した瞬間に使えるわがが全部わかってしまう不合理を表に出さないよう、本格的なバトルには巻き込まれないストーリーになっていました。

ポケモンという全然違うフィールドに引っ張り出されたとき、選び方や戦い方でキャラの個性を出せるかな、と思って書いてみました。